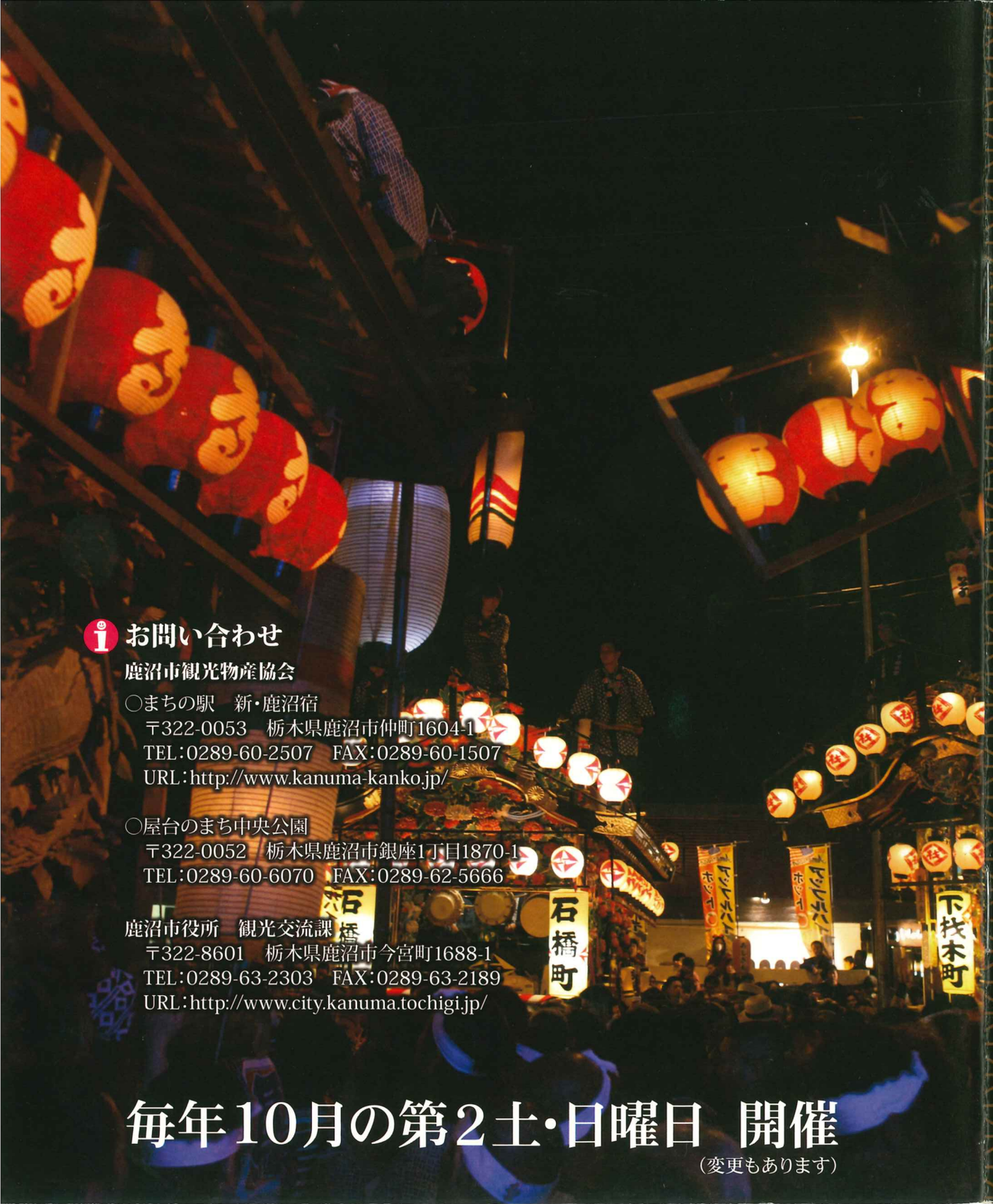
鹿沼秋まつり



お問い合わせ

鹿沼市観光物産協会

○まちの駅　新・鹿沼宿
〒322-0053　栃木県鹿沼市仲町1604-1
TEL：0289-60-2507　FAX：0289-60-1507
URL：http://www.kanuma-kanko.jp/

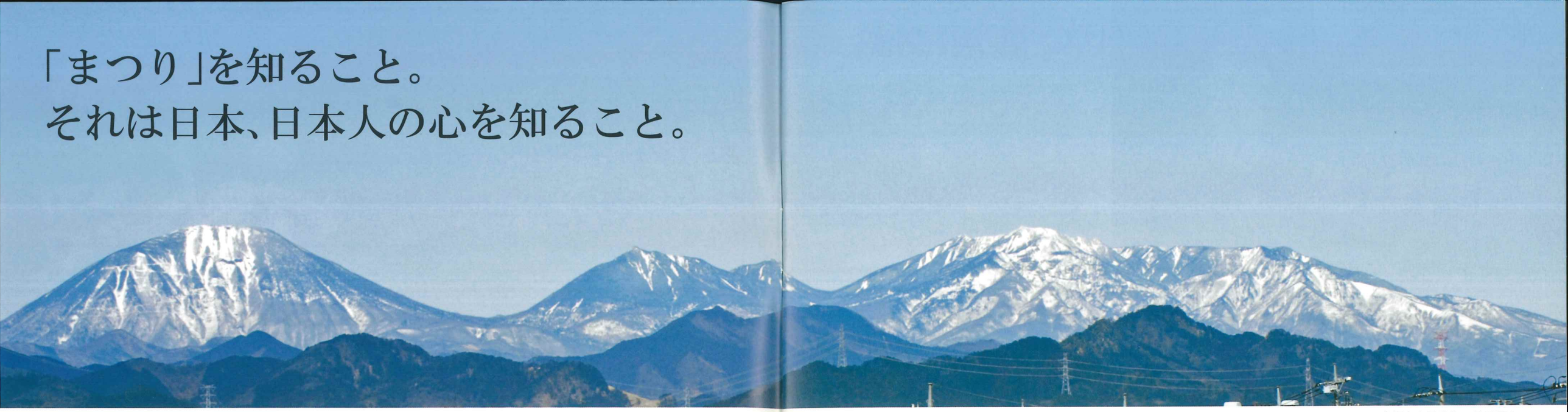
○屋台のまち中央公園
〒322-0052　栃木県鹿沼市銀座1丁目1870-1
TEL：0289-60-6070　FAX：0289-62-5666

鹿沼市役所　観光交流課
〒322-8601　栃木県鹿沼市今宮町1688-1
TEL：0289-63-2303　FAX：0289-63-2189
URL：http://www.city.kanuma.tochigi.jp/

毎年10月の第2土・日曜日　開催
（変更もあります）

栃木県鹿沼市

「まつり」を知ること。
それは日本、日本人の心を知ること。



鹿沼から見る冬の日光連山

加蘇山神社の奥宮を祀る洞窟

ササガミサマ

古来から日本人は、万物すべてのものに神が宿ると考えてきました。太陽・月・風・雷などの天体や気象、田・畑・川・岩などの土地や地形、さらには台所やカマドなど、あらゆる所に神を見出しました。「八百万の神」といわれています。

とくに山々は、その雄大な容姿や火山などに対する畏怖・畏敬の念から、信仰の対象となりました。麓の村々では、春になると山の神が里に降りて「田の神」となり、秋の収穫を終えると山に帰ると信じられてきました。

「まつり」は、本来「神々を祀る」という意味ですが、年中行事や通過儀礼と関連し、日本人の日常生活のサイクルと深く結びついています。

現在行われるまつりの多くは、「ハレ(非日常)とケ(日常)」のサイクルの中の「ハレ」の空間・時間を象徴するものです。しかしながら、このまつりの中には、日本人が日常から大切にしている「心」を見ることができます。

関東平野の北にそびえる日光連山、とくに男体山は、奈良時代(710−794)から「祀り」の場であり、「修験」の場でもありました。鹿沼の人々も、日光連山を神として崇め、大切にしてきたのです。

今宮神社の祭祀

鹿沼には、　多くの「まつり」がある。

発光路の強飯式（毎年1月3日）
祭礼当番の交替を「修験」の儀式で行う。

上殿大々神楽（毎年数回）
今宮神社などの祭礼の際に上演、奉納される。

東京―日光の間に位置する鹿沼市。東京からわずか100㎞の距離にあります。鹿沼には、日本人の「心」、日々の暮らしを垣間見ることができる「まつり」がたくさん残されています。昔からの暮らしを伝える文化財として、国の指定などを受けたまつりの数は、全国でも有数。
日本人の心を知るためのまつりを見るなら、鹿沼へお越しください。

奈佐原文楽で使用される人形頭

奈佐原文楽（毎年数回）
１体の人形を３人で操り、芝居を演じる。

生子神社の泣き相撲（毎年９月）
相撲で子どもの成長を願う。

鹿沼秋まつり

このまつりは、国の重要無形民俗文化財に指定されています。
そして、ユネスコ無形文化遺産にも…

鹿沼のまつりの中でも、今宮神社のまつりは圧巻。毎年10月の第２土・日曜日に行われ、30万人を超える人々で賑わいます。

男体山を神として祀る今宮神社。江戸時代（1603－1868）、鹿沼宿の氏神として人々の尊崇を集めていました。今から400年以上前のこと…。日照りと大旱魃で困っていた鹿沼の人々が神社に祈りを捧げると、激しい雷雨があり、作物を育てることができました。この神への感謝の気持ちが、まつりの始まりです。

このまつりには、「動く陽明門」とも形容される、全面を彫刻で飾られた屋台が登場。「風流」という日本の美意識の中から生まれました。その数は27台もあり、全国でも有数の規模を誇ります。

屋台を運行するのは、今宮神社の氏子たち。屋台に乗るのは、囃子を演奏する囃子方です。彼らは、自分の町の屋台・囃子に誇りを持ち、屋台の運行技術や彫刻の出来栄え、囃子を他町と競いあい、まつりを盛り上げます。

まつり1日目　伝統を堪能する。

繰り込み

まつりの１日目は伝統を堪能することができます。中心となる舞台は今宮神社。

神社で行われる、彫刻屋台の「繰り込み」と「繰り出し」が、まつり１日目最大の見どころ。氏子たちが今宮の神に１年間の無事を感謝し、畏敬の念を表すのです。

「繰り込み」は、彫刻屋台が神社の鳥居をくぐって境内へ入り、本殿に正対して、囃子を奉納します。最大で27台もの屋台が参道から１台ずつ厳かに入っていきます。

「繰り出し」は、神社に集まった屋台が１台ずつ鳥居から出ていくシーン。提灯の灯りと伝統の作法が見る人を幻想の世界へ誘います。

これらのシーンには、様々な「しきたり」があります。長い年月をかけて先人から受け継がれてきたもので、見どころの一つになっています。

伝統に裏付けられたまつりだからこそ、味わえるひと時。日本人が、そして鹿沼の人々が古から何を感じ、何を大切にしてきたのかを味わえるシーンです。

繰り出しの順番を待つ彫刻屋台

繰り出し

繰り出しの際の「しきたり」

まつり２日目
盛り上がりを楽しむ。

彫刻屋台のパレード

まつりの２日目は、市民の盛り上がりを楽しみましょう。舞台は市街地の中心部。

まつりに参加する若衆は、１日目の緊張から解き放たれ、まつりを楽しみます。彫刻屋台がパレードし、自慢の屋台を披露。市民も、マーチングバンドやダンスなどで、まつりを盛り上げます。

「ぶっつけ」と呼ばれる囃子の競演は、１・２日目とも行われる、まつり最大の見どころ。屋台に乗る囃子方の腕の見せどころ。まつりの熱気が一気に盛り上がります。

一方で、厳かな「時代絵巻」も繰り広げられます。今宮神社の神が、行列をつくって氏子各町を回り、各町の安全を約束します。「御巡幸」と呼ばれる行事です。

市街地略図

囃子

御巡幸

27台の彫刻屋台が揃う、圧巻のまつり。

全国のまつりの中でも、これだけ多くの屋台がそろうのは、珍しいものです。鹿沼の彫刻屋台は、彩色と白木の2種類に大別でき、27台のうち14台が江戸時代につくられています。

上組

下組

田町下組

田町上組

屋台に付けられた彫刻。
霊獣たちが躍動する。

二頭の龍

屋台に付けられた彫刻は、全国でもその多さに例がなく、見事なもの。鹿沼の彫刻屋台は、「動く陽明門」とも呼ばれます。

江戸幕府の威信をかけて建造された日光東照宮の影響もあり、江戸の文化・技術を伝承する地元の職人たちがつくりあげました。東照宮の彫刻を手がけた棟梁が精魂を込めて彫ったものもあります。

屋根の前・後に取り付けられた「鬼板・懸魚」は、彫刻の中でも、もっとも見応えのある部分。霊獣「龍」「唐獅子」「鳳凰」などがモチーフになっています。「鳳凰」の背景には「桐」を配置するなど、想像上の動物である霊獣と背景との組み合わせ、構図には、古来からの意味、美意識があります。

一方で、屋台彫刻では、実在の動物や鳥、植物も数多く見ることができます。随所に、江戸時代の日本人の美意識を感じることができるでしょう。

桜に山鵲

葡萄に木鼠

桐に鳳凰

牡丹に唐獅子

菊に金鶏鳥

まつりは氏子の心意気

まつりを支えるのは、今宮神社の氏子や囃子方。市街地 34 町の氏子たちは、神に感謝の気持ちを表すとともに、１年１度の「ハレ（非日常）」の日を堪能します。囃子方は、市街地周辺の人々が務めます。囃子の音が屋台を曳く氏子の心を一つにし、まつりを盛り上げます。まつりに参加する全員の心が一つになったとき、まつりは最高潮に盛り上がるのです。

囃子がまつりを盛り上げる

演奏される囃子は、江戸時代から伝わるもの。五段囃子が基本です。起源は、関東周辺の祭囃子の起源と言われる江戸の葛西囃子。五線譜ではなく、「コトバ譜」と口伝で伝承されてきました。

屋台に乗る囃子方は笛１人、大胴１人、締太鼓２人、摺り鉦１人の５人。囃子の音がまつりの気分を一層盛り上げていきます。

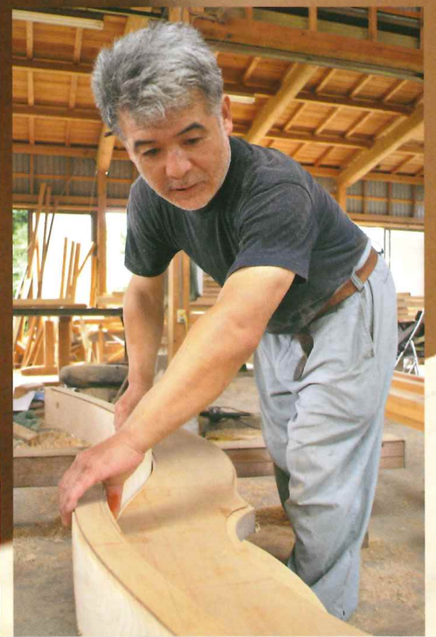
錺師
タガネを使って、銅板に一つひとつ文様を刻んでいきます。金箔を３回押して焼き付け（鍍金）、黄金色の金具をつくります。

まつりを支える…

江戸時代からのまつりを支えてきたのは、氏子や囃子方だけではありません。先人から引き継いできた確かな技術が、彫刻屋台を、そしてまつりを支えてきました。

彫刻屋台は、江戸時代につくられてから、何度も修理が行われ、現在の姿になっています。

彩色師
「岩絵の具」と呼ばれる、鉱物を砕いた顔料を使い彩色します。金色は金箔。日本伝統の技術が息づいています。



技術・職人

その修理に携わってきたのが、鹿沼の誇る職人たち。

大工と車屋が屋台の車体を手がけ、彫工は彫刻で車体を装飾します。仕上げは、彫刻などに色を施す彩色師と金具を担当する錺師。１台の彫刻屋台を制作・修理できる職人がそろうのは、全国でも多くありません。

彫工
屋台彫刻に使われる木は、トチ、イチョウ、ヤナギなど。完成した形を頭に描きながら、ノミをふるいます。

車屋
胴と呼ばれる中心部にはケヤキ、それ以外はカシの木が使われます。釘を使わず、２～３ｔの車体を支える堅固な車輪をつくります。

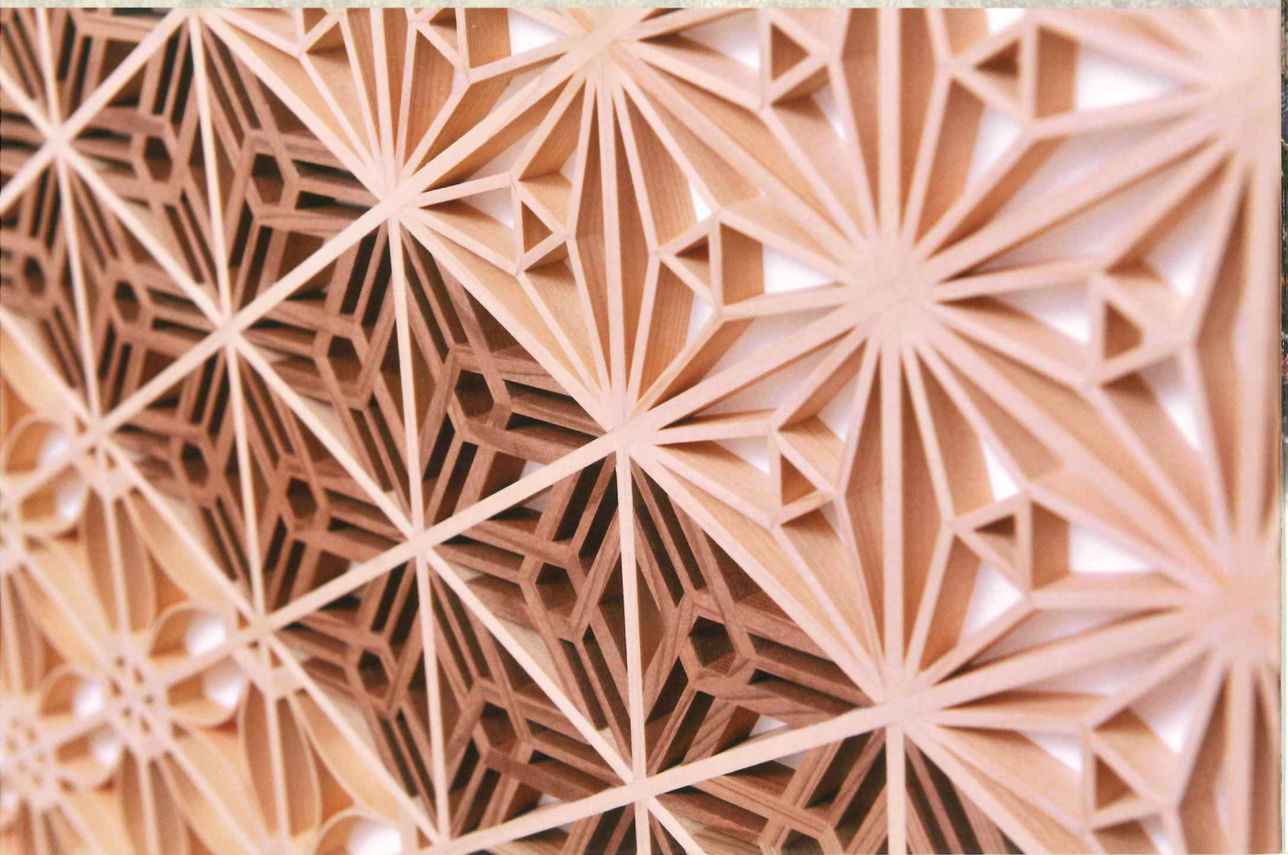
大工
車体には、おもにヒノキが使われます。動かない建物と違い、揺れることを計算した構造をつくりだします。

鹿沼の伝統を今に伝える。

彫刻屋台がつくられた江戸時代、鹿沼周辺の村々では、木材や麻の生産が盛んでした。これらの特産物は、鹿沼に集められ、河川を利用して、大消費地・江戸に送られていました。

鹿沼には、木材や麻を扱う職人や商人が多く住んでいたため、現在でも、その伝統を受け継ぐ産業が盛んです。このような背景があって、現在でも彫刻屋台を手がける職人が鹿沼には残されているのです。

鹿沼組子
日本が誇る木工芸の粋を集めた伝統の技。伝統的な和室の内装に使われています。1～5㎜程度にスライスした木材を釘を使わずに組みつけ、さまざまな文様をつくります。0.1㎜の誤差も許されない、繊細な技術が求められます。



大麻
日本一の生産量を誇ります。皮を剥いて繊維にし、衣服やロープなどに使用します。日本では、麻には「魔除け」の意味があると信じられ、神社の注連縄などにも使われています。

東京から電車で90分。鹿沼には、日本の文化を育んできた、山や川、田園が広がります。

東京から北へ約 100 ㎞、電車で約 90 分。東京からちょっと足を伸ばせば、日本の原風景に出会うことができます。日光へもわずか 20 分。

鹿沼には日本人の心を伝える「まつり」が多く残り、日本の昔ながらの風景があります。

市街地の標高は 150mほどですが、市域西部には 1,300mもの山々、高原が広がり、美しい自然を堪能することができます。

豊かな自然と鹿沼の人々が育てた「かぬまブランド」も魅力です。

「かぬまブランド」の一つ「イチゴ」

鹿沼へのアクセス

- JR日光線鹿沼駅（東京駅から70分・仙台駅から100分）
  新幹線利用宇都宮駅乗り換え
- 東武日光線新鹿沼駅（浅草駅から80分・JR新宿駅から90分）
- 東北自動車道鹿沼ICから15分（約8km）

● 施設位置略図 ●

1 屋台のまち中央公園

2 仲町屋台展示収蔵庫

3 木のふるさと伝統工芸館

まつりの期間以外も、彫刻屋台を見ることができます。見学できるのは4施設。4施設ともＪＲ鹿沼駅、東武新鹿沼駅から約15分の徒歩圏内にあります。市内を散策しながら、7台をじっくり堪能できます。

1 屋台のまち中央公園　（月曜休館　大人200円）
3台の彫刻屋台とまつりの概要を展示。観光物産館を併設。

2 仲町屋台展示収蔵庫　（火曜休館　無料）
1台を展示。日本古来の蔵造りの建物も魅力。

3 木のふるさと伝統工芸館　（火曜休館　無料）
1台を展示。「組子」などの木を使った鹿沼の伝統工芸品を展示。

4 文化活動交流館　（月曜休館　無料）
2台を展示。市の歴史、伝統作物「大麻」をあわせて展示。

4 文化活動交流館